

石の仏に見る隠された顔

——東栄町の石仏を中心として——

石仏のイコノロジー⑨

★はじめに

石仏に、キリスト教的痕跡が隠されていると見るのは筆者の仮説^(注1)である。筆者がこのような領域に入り込んだ理由は天竜水系の花祭、奥三河の文化を研究していたからに過ぎない。だが、三河山間部に子抱き地藏(子安地藏)、子安観音の多いことを、調べる中でその背景に隠れキリシタンの問題が浮かび上がってきたのである。そこからマリア地藏、あるいはマリア観音という言葉に惹かれながら中山道、東三



図-① 新城市・四谷 方瀬の双体仏
顔に十字架

河各地の石仏との類似性を探って見た。だが、「隠れキリシタン」を意識させたは、やはり中山道での「マリア」という名称であった。そして、新城市四谷の方瀬にあった双体仏が隠れキリシタンのことを強く考えさせてくれたのである。だが、調べてみても奥三河山間部には隠れキリシタンに関する記述は出てこない。郷土史の方々からも「ない」という言葉しか返ってこなかった。しかし、現在の名古屋市周辺、尾

春日井 眞 英

張から美濃にかけてキリシタンが居た事は織田信長の時代のころから知られている。殊に犬山から清洲にかけて日本人信徒コンスタンチノ(結城山城守忠正)の活動からも何うことは出来る。彼は、現在のあま市美和町花正を中心として永禄十(1567)年頃から布教したと伝えられている。しかも、この地は天正十(1582)年の本能寺の変以来、織田信雄が反秀吉の力を溜めていたところとも目されている。そして慶長のキリスト教禁制令によって慶長元年(12月19日)(1597年2月5日)に長崎でカトリックの司祭、修道士、信徒が処刑されるが、その時に処刑された日本人二十名のうち尾張出身者が五名、伊勢出身者が五名とされ、そこには十二歳の尾張出身の少年がいたという。このことは尾張、伊勢の持つ経済的力を考える上で重要である。南蛮貿易という経済的な絡みだけではなく、海外文化の吸収という面でも問題になる。さらには、領主の交代という政治的な問題に繋がり、軽く論じることではできないがキリスト教に寛容であったという福島正則が慶長五(1600)年、清洲から安芸に転封され、家康の四男の松平薩摩守忠吉が領主として清洲城に入るが、その背景には宗教的な側面での融和的な政策が取られていたと考えられる。しかし徳川家が関わるということによって周辺の地付きのものたちにとっては困惑があったに違いない。このことは、五十年余り火種のように燐り続け、寛文元(1661)年、塩村・雉子村(現・可児市)に領地を持つ旗

石の仏に見る隠された顔

石の仏に見る隠された顔

本の林権左右衛門の訴えによってキリシタンの捕縛から、弾圧へと拡大化されて行くが、そこには尾張、美濃の根強いキリシタンの信仰が在ったことを意味する。少なくとも小牧、岩崎界隈の石仏の姿からでも、信仰の存在は指摘できる。しかも、キリシタンの存亡は尾張の城下発展のために清洲の町ごと名古屋に移動する「清洲越し」と無関係ではない。清洲はこのことで経済的基盤が薄れるが、清洲の商人達の新たな経済的基盤を求めている活動は続いたであろう。それは、名古屋の笠寺などに残るキリシタン灯籠などの存在から信仰が厳然として生き続けたことを知ることができる。この寛文元年の弾圧は寛文十一(1698)年頃まで続き、濃尾地方ではこれによってキリシタンは根絶したと考えられている。また長崎で浦上四番崩れなどで捕縛



図-② 芦と見 されたキリシタン達が名古屋に送られ、現在の中区栄国寺界隈にあった千本松原界隈の牢に収容されたキリシタンは寛文十一(1698)年頃まで続き、濃尾地方ではこれによってキリシタンは根絶したと考えられている。また長崎で浦上四番崩れなどで捕縛

されたり、処刑されていたことも歴史的事実である。だが、弾圧によってキリシタンは尾張部から消えていったかとなると、石仏の意匠などから考えると逆になる。筆者は、そのことをこれまでの論考の中で指摘しているが、足助など各地の共同墓地などで見える三角形の墓石(自然石であったり、少し加工を施してある)なども隠れキリシタンに関連するものと考えている。この三角形の墓石のことについては稿を改めたい。

本来ならば、十字架などの非仏教的装飾を持つ石仏だけでなく各地の墓石に見る戒名、そこに記されている文字などにも意識を向けるべ

きかも知れないが、素通りされているのが現状である。時には戒名、名号には考えさせられるものがある。少なくとも、石仏の台座、手にする仏具、そして石仏の顔などはこれまで気をつけてきたが、光の加減、あるいは見る角度によって顔面に十字架(図-①)が浮かびあがって見えたときは驚きであった。これが仏教的世界からの思い込みを前提として石仏を見てきたことに気がつくことになった。これまでは、その手にする仏具はなにげに見過ぎていた。そのことに気がついてからは、さらなる気づきがあった。長崎県壱岐美濃谷(ミノタン)の観音堂の脇の手水鉢(図-②)なども、ただの変った手水鉢として見過ごしてしまうものかも知れない。マグカップのような手水鉢は、魚イクトウスとハートの組み合わせとなった。土地の人は、蛇、もしくは鎌と見ていたようであるが、ここにキリスト教を象徴するイクトウスを見立てたい。

さらに壱岐などでも見ることが出来るが石仏の台座に十字架が隠されている。たとえば名古屋市昭和区の尚文寺、徳林寺等に見る石仏(図-③)でも、その台座に十字架が刻まれている。同じく西光院にある墓碑の戒名も気になるものである。

つまり、キリシタン達は一般庶民に限らず商家や武士階級にまで及んでいたことは二十四聖人に清洲の人々



図-③ 昭和区・尚文寺の石仏台座の処に十字架がある

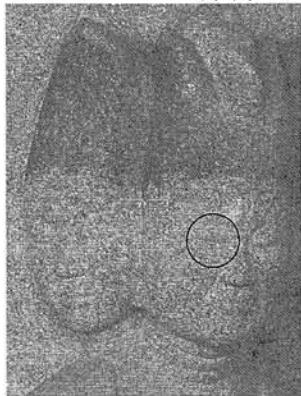


図-④ 豊川市金像寺 馬頭観音の右眼が十字架

が含まれていることから覗えられる。これは名古屋市区円頓寺の由来とも結びつくかも知れない。名古屋市区の圓頓寺が現在地に移転して来たのは享保九年（1724年）の大火の後の事という。元々その界隈は武家屋敷が多く、徳川義直の側室・貞松院の下屋敷などもあったという。一説には、この下屋敷に寺が立てられ、本堂は名古屋城天守閣の余材を拝領したと言われているのは貞松院の働きがあったからかも知れない。この寺は、貞松院の寄進した鬼子母神像を祀るが、この像も本堂と同じく名古屋城天守閣の余材で作られたと伝えている。興味深いことはこの寺が日蓮宗であること、そして鬼子母神を祀ることとは子安観音に通るものでもある。また、年代的に重なるのが朝日重明の日記である。「鸚鵡籠中記」の中で名古屋の城下町である女性を見て、かつてキリシタンだった者と記している。このことは一般的に

言われている以上にキリシタンがいたことを意味しよう。しかも、それは一般庶民の場合だから残っているのに過ぎない。商家や武士の場合にはなかなか表には出てこなかったであろう。三河方面では隠れキリシタンの存在はなかったとされている。それは巧みに隠れていたからに他ならない。証拠がないというのが一般的な理由だが、逆に証拠があれば身の危険を招くことは明らかである。だが、地域の石仏などを見ていく限り、犬山・寂光院の奥の院に見る三十三観音や、豊川の金像寺の馬頭観音の眼（図-4）などに見る十字架の意匠から隠れキリシタンの存在は否定できないであろう。



図-⑤ 豊田市・稲武龍淵寺の天使型石造（年代不詳）

キリシタンの痕跡はなにも「石仏に十字架」と限るわけではない。筆者は平成2017年に豊田市内で天使型（エンジェル）の合掌する石像を見つけ、学会で

石の仏に見る隠された顔

報告している。その際、いくつかの観音像の光背、あるいは天衣の意匠が翼に変形していく過程についても報告した。さらに筆者が関心を持つ家型墓石（石室型）の前扉の模様などに十字架もしくは三位一体を伺うことの出来る図柄（このことについては稿を改める）を見ている。これらが家紋などではなく、石室の扉に限定する図柄だとすれば地域的特性が問題となるかも知れないが、愛知県北設楽から長野県の上・下伊那郡地方の墓地に見ることが出来る。いくつかの家型墓石（駒ヶ根）は慶安四（1651）年の年号を記している。この年は島原の乱の年でもある。つまり、キリシタンに対する弾圧と禁制が厳しくなり始めた頃のことである。

★社会経済的側面から北設楽を考える

長野県駒ヶ根市（現代）は飯田市と並んで歴史的に中山道の要衝であった。この地は天竜水系があることで、太平洋にも近くなり。陸路では三州街道などを經由して愛知県北設楽から吉田（豊橋）、作手、田口（設楽）にも近い。つまり、北設楽郡は中山道にも近く、上矢作から稲武、設楽、豊川を経ると吉田（現豊橋）に通じ、天竜川、矢作川あるいは中馬街道を利用しての物流の鍵を握る位置にある。現在では、山の中の僻地と見られているが歴史的には天竜水系と矢作水系を睨みて、名古屋、豊橋、浜松に通じる飯田への脇街道であったことになる。その中でも注目したいところは天竜水系と矢作川水系とを併用した道筋である。つまり秋葉街道と中馬街道の役割である。このことは、北設楽郡の寺の数とも関連してくる。それは、宗派の問題とも繋がるかも知れないが、物資を介して都市部と山間部の、商取引の問題に関わっていたと考えている。とくに山間部の寺では、その石垣や本堂の立派さには驚かされるものがある。そのような寺院を維持していくためには寺院と周辺地域の経済的連携を考えなくてはならなくなる。

石の仏に見る隠された顔

寺院同士の関わりも問題となつて来る。

そのような繋がりを同わせるのが愛知県北部の津具の金龍寺と駒ヶ根の広善山蔵澤寺との関わりである。^{註1}また、津具の近く設楽町名倉には高遠の石工・守屋貞治の作仏もあり信州高遠の石工と愛知県の交流の深さを見ることが出来る。宗教的な視点から見ると、戦国大名の京極家がキリスト教に帰依していたことは有名であり、宣教師も京からこの地（飯田・高遠）に招かれていたという。歴史的背景は別としても、愛知県の北設楽界隈は三州街道、あるいは別所街道・伊那街道と呼ばれる街道があるだけではなく、山の中を通る脇街道もある。人々の交流が盛んだったと言える。この街道筋を手がかりに石仏を調べることで奥三河の交流圏が見えてくる。つまり、高遠石工が遠州へ、尾張へと進出する事に伴って、必然的に山から海へと文化的交流が拡大したことは否定できない。そのことは単に戦国時代の武将達が京への道として三河地方を見ていた事とは異なると言える。奥三河地方は、天竜川という水系によるだけではなく、諏訪に出ることによって日本海・太平洋側とを結ぶ要としての意味を有していたことが、奥三河の「花祭」という民俗芸能の祭文から伺うことが出来る。諏訪の文化と伊勢の文化を花祭の祭文の中に見る事は容易である。それは何も花祭に限るものではない。しかも花祭の背景に熊野信仰や、諏訪信仰に繋がるとされる「シカウチ行事」をも含めて見ていくと、この地方の独特の精神的風土が、太平洋側、諏訪側との交流の中で形成されて来たことが考えられる。そのことは、かつて武井正弘が「奥三河は宗教的アジールだ」と指摘したことに繋がると言える。それは、奥深い山の中に花祭やシカウチという民俗行事が継承され、形成してきた精神文化の存在を指摘していたのかも知れない。それは異質なものを受容する懐の深さ、広さを意味していたのである。この力は時には社会体制と対峙して来た。明治期の廃仏毀釈に絡んでの花祭の変化が、そのことを物語っている。

北設楽、あるいは奥三河を宗教的アジールとして見ていけば、そこには受容から変容へ、変化から進化・発展への場としての地域性を見ている。北設楽の津具（現・設楽町）は廃仏毀釈の活動を花祭に働き掛けた処でもあり、地域は花祭の変容のために苦労した。東栄町中設楽、東園目などの花祭の鬼達が角が切り取られたりした背景にも廃仏毀釈の問題が絡んでいることは知られている。それは、キリシタンの場合でも同じではなかっただろうか。中山道の大井宿（現在の恵那）から奥矢作、稲武を経て細江（浜名湖の北岸）に向かう道筋がどのように機能していたかを考察することは今後の課題だが、奥三河の地理的条件が隠れキリシタンの文化を受け入れ、匿った背景があると考えられる。

北設楽界隈を以上のような社会経済的背景で捉えようと、必然的に人的、物資及び経済的交流を意識しなくてはならなくなる。人的交流とは新しい文化の導入を意味し、開かれた意識へと変貌させる。そのような意味で、奥三河各所に見る三十三観音霊場に子安観音が存在するのは変貌した意識の現れであり、受容と変容の姿と考えたい。観音がマリアに変貌する過程を片岡弥吉は『浦上四番崩れ 明治政府のキリシタン弾圧』の中で次のように記している。^{註2}

天主堂（浦上・筆者）の小祭壇には、フランス渡来のサンタ・マリア像が安置されている。サンタ・マリアはキリシタンたちにとって七代伝承の崇敬の対象であり、心のよりどころであった。幕府の仏教国教政策に順応し、仏壇に祀った観音像に、キリシタンたちはサンタ・マリアのイメージを求めていたほどである。それは後世マリア観音と言われる。観音の多くはシナ渡来の観音であって、とくにキリスト教的特徴を持たないものであるが、潜伏時代のキリシタンたちがサンタ・マリアとして祈りの対象とした由来を持つことによってのみマリア観音といわれるのである。

片山の言うマリア観音は長崎地方ではシナ渡来のものであるが、筆者が東海地方で見ているものは仏壇に飾られるものではない。路傍の石仏であり、子安観音である。しかし、そこには何らかの非仏教的要素があることを確認しておきたい。だが、それら非仏教的要素は注意しなければ判らない。また石仏の造営には少なからずの金銭的な問題が関係してくる。つまり、石仏造営を支える社会的背景である。石仏、あるいは墓石を造営していくとすれば、墓石ならばその家の個人的な問題であろう。だが、石仏、石像ならば個人ではなく、地域、共同体との絡みも問題となる。このことは地域全体の中の経済・社会的変化な変化があったことを意味する。墓石の場合は戒名の問題も出て来る。これは、単にコストの問題ではなく、個人さらに地域と寺との問題でもある。また、石仏を造るには石材、手間賃などのコストは無視できない。地蔵を、観音像を彫るにしても、石工という特殊技能の持ち主が必要であったであろう。つまり、経済的に裕福でなければ依頼すらできないことになる。円空や、木喰のように鉋で刻んで来るのは意味が違うのである。

西海賢一は、曾根原俊吉郎説を引用し石仏造立の要因を次の三点にまとめている。

(1) 民衆に近づく僧侶達が、地蔵講や庚申講などを広めているが、その過程において、石仏造立の必要性が説かれたのではないが、
(2) また、聖や廻国僧などが遊行の都度、石仏造立を勧めたばかりでなく、勧進した浄財の一部をその基金として与えたことも考えられる。

(3) 当時の庶民にとっては、石仏造立はひとつの悲願でもあり、これによって現世利益を願い、かつ奇跡への期待感があったのではないか。

石の仏に見る隠された顔

だが、実際に石仏を彫るのが誰なのかという疑問は残る。そして地蔵講や庚申講の分布と石造の分布がどの程度重なり、何処の石工が関わったかは、判らないところが多い。また地蔵、あるいは観音と言っても、そこには多様な地蔵、あるいは観音が存在する。

津具、設楽、作手からは材木が吉田(豊橋)方面に流れ、三河及び尾張部からは塩が入っていたと見るのは地理的情勢を考えれば当然のことである。三河の塩とは、ここでは三河湾沿岸の高浜、吉良、西尾のことである。多分に尾張のものとは競合していたのであろう。塩の流通を考えることも大事なことになる。この地の塩が尾張まで出てくるのか、岡崎から足助に抜けたのか(矢作水系を用いたのか)については今後の課題として、商取引は地縁・血縁者を中心として営まれていたのではなかったか。これは、西尾辺りから佐久間にかけての寺院での鯖大師の分布から読み取ることができる。もちろん、設楽、豊田の山の中の寺などにも見受けられるが、西尾などの寺から、天竜水系流域の寺に掛けて鯖大師の分布が気になる。つまり鯖大師の分布を筆者はキリスト教信者の活動の痕跡の一つと考えたいのである。それは鯖(鯖)魚イクトウスという繋がりからである。林宏は、その著『鯖のななし』の中で愛知県内の鯖大師にも触れている。彼によると名古屋市内では千種区覚王山日泰寺の東、四国八八所霊場の番外の脇の一カ所、残りは豊田市内、新城、鳳来(現・新城)豊橋、渥美にあるとしている。佐久間のことには触れられていない。また、岩倉の松永寺には木造の鯖大師像があると記している。この他にも筆者の調べた範囲では、名古屋市内では中区金山に鯖大師を祀る寺があり、さらに岡崎市の明大寺町に万燈山吉祥院、菅生の蜜峰寺(木造)でも祀られている。さらに林氏が指摘されている中で興味深いのは、豊田市内では石像の大師像の数は160件であった中で鯖大師は14件に過ぎなかつ

石の仏に見る隠された顔

たという記述である。そして、知立市などの鯖大師の寄贈された年代の調査から明治から大正のものが多く、その大半が馬匹輸送に関わっていた馬方らのものと指摘されている。そのなかで、興味を引くのは鳳来町の鳳来寺塔頭「岩本院」址に残る鯖大師の台座に「加州組あやもと」「昭和三年十一月建立」という女性の名前の存在である。鯖大師の寄進の状況は全体的に明治、大正と年代的に新しく見えるが、それは経済的に安定してきた時代を意味すると共に、馬匹輸送からトラックに変化した時代でもあったと言える。かつて新城市で「私は長崎の出でクリスチャンです、カトリックです」という老女と話をする機会があった。詳しいことは伺わなかったが、浦上四番崩れで故郷に戻れなかった人が、三河の方にも来ていたという話もある。林氏は、さらに豊田市保見の宋岳寺の住職の話として、山門脇の祠の鯖大師は門の外なのでお寺でお祀りしているものではないとの話も紹介されている。ここでは、隠れクリシタンの事は出てこないが、中山道でも、設楽町でも同様に十字架、もしくはクリシタンの要素を持つ石仏などは寺とは関わりが無いとされている。

★石仏について

筆者にとって、石仏がただの路傍の風景でなくなったのは、その顔に十字架が巧みに彫り込まれていた、手にする仏具や本体に十字架が確認できたことにある。初めは筆者の思い込み、そして偶然の産物、あるいは錯覚かとも考えたが、調べるほどにその数が増えていき、単なる偶然とは言えなくなり、「石仏に、クリスト教の痕跡がある」と仮定しても、可能と考えられるようになった。

愛知県の東部、東三河地区では江戸時代にクリシタンが居たという話は聞かない。しかし、レオン・パジェスの『日本切支丹宗門史』^(年上)には、三河でのクリシタン処刑の話が記されている。このことは、逆に

言えばクリシタンの問題は地域で隠蔽されていたことを伺わせる。社会経済的には、太平洋側から内陸の長野側には尾張部から中山道という主要街道が走り、木曽川流域には尾張藩の眼があった。しかし、三河あるいは遠州側からは三州街道、秋葉街道を介して人や物の動きがあった事は否定できない。すでに述べているように、駒ヶ根の蔵澤寺の直指人丹瑞^(年上)はクリシタンの息子であったが、蔵澤寺の住職に引き取られ、三州津具の金龍寺で得度を受け、伊那地方の常円寺十一世、蔵澤寺三世として住職にまでなりながら住職世代が抹消されているという。そのような弾圧の中でクリシタンが逃れる道を探すとすれば北か、南となる。南ならば三河方面になり、北であれば、新潟越後もしくは上田から上州、関東へ、東ならば甲州、関東になり、さらに西であれば富山、越中を考慮しなくてはならない。丹瑞の父親は金沢方面から来たとも言われている。これらのことは今後の課題である。

★東栄町の石仏

筆者の石仏調査の始まりは、愛知県の北設楽からであった。その中でも注目するのは東栄町古戸の普光寺脇の石仏である。だが、この頃は石仏の彫られ方に注意を払っていなかったのが残念である。たとえば一体の石像が一つの石塊に彫られているか、複数の石仏が一つの石のなかにあるのか等である。一般的に一つの石の塊から一体の石仏が

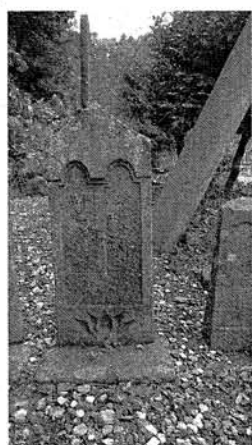


図-⑥ 古戸・卵塔場比翼墓。下部の蓮弁の数が八ではない。

彫られている。たとえば、地藏、観音、馬頭観音である。しかし、この隠れクリシタン関係の石仏を調べるにつれて、一塊の石に双体仏、三

体仏、場合によっては四体の仏が彫られていることがある。もちろん、六地藏は一体づつのものが多い。中には、石幢にされ六体のもの、三
 体づつ2個の石に分けて彫られているものもある。そして双体仏は各
 地の教育委員会の出版物では「道禄神」あるいは「道祖神」に分類さ
 れている。古戸の卵塔場に見る双体仏も、地区では道禄神と呼ばれて
 いて、道祖神と見立てられている。しかも、双体仏を二尊と見る事も
 可能である。それは、釈迦と阿弥陀を示すともいい、三尊仏の脇に立
 つ二菩薩とみなされることもある。ちなみに京都の二尊院は、釈迦と
 阿弥陀である。その視点で考えると古戸のものは異質である。古戸の
 普光寺脇の卵塔場は、盆の行事の出発点であるとともに、盆の舞手達
 の解散場所でもある。今は道がしっかり付いているが、昔はこの卵塔
 場の下河原が墓地だったと聞いた。現在、墓地は普光寺の裏の山手
 に広がっている。この卵塔場にある石仏達はもともとは隘路になっ
 ている道の上手にあった。しかし天候不順の折に落ちて来て危ないこと
 から上手の石仏などを整理し、管理できるようにしたという。だが、
 注意してみると頭と胴体が別物もある。この卵塔場に見る墓の特徴の
 一つは、比翼墓である。夫婦と覚しき二人の名前が彫られていること
 である。しかも、駒形の板碑で人型に削られているものもある。名古
 屋市内でもこの種の駒形板碑を見ることが出来る。板碑の頭部には家
 紋が付かない。代わりに満月型の円が彫られている。古戸の比翼墓に
 は、戒名として「***禅定門」「***禅定尼」と記され、墓石の
 枠には寄進した人物の
 名前も彫られている。
 これら墓石を見る限り
 において隠れキリシタ
 ンを想定できる要素は
 少ないように考えられ
 る。だが、墓石の下部



図一⑦ 比翼墓の一つ花
 の形に注目している。
 58×35

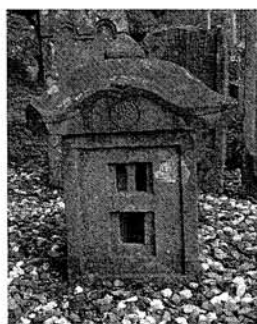
石の仏に見る隠された顔

に彫られている蓮華をイメージさ
 せる彫り物は、その花卉の数など
 から注目したいところである。一
 般的に、各地で見える墓石の場合は
 蓮華は八葉である。しかし、筆者
 はその花卉の数が、八でないこと
 に注目している。さらに、比翼墓
 には蓮の茎状なものが彫られてい
 るものもあり、興味深い。それは
 蓮華ではなくチューリップ様に見
 えるからでもある。残念ながらその比翼墓は上部が欠損している蓮
 花のように見えながらも、意匠の微妙さに問題があると見ている。今
 のところ年代などが判らない。しかし古戸の普光寺の過去帳と照らし
 合わせることができれば何か具体的に見えるかも知れない。



図一⑧ 連弁の数は、一般的に八
 である。しかし五、七など地域的
 に特徴が在るようだ

古戸の卵塔場では興味深いのは、「道祖神」あるいは「道禄神」と
 地域の人々が呼んでいる双体仏を見ることが出来るのだが、安曇野の
 道祖神のように杯ごとをしたり、手に手を取り合って見つめ合ってい
 るような微笑ましいものではない。手を合わせ厳肅な面持ちで誰か第
 三者を見るかのような双体石像なのである。しかも左の者は「子供」
 を抱えているように見える。東栄町には道祖神と見立てられている石
 像がいくつかある。だが、その
 多くは陽石であり、安曇野で見
 るような微笑ましい姿は『東栄
 の石仏』では三体あるか無いか
 である。そのうちの2例は女性
 が座り男性の方を向いている。
 その他にも、厳肅な雰囲気を持つ



図一⑨ なかに図一⑩同
 様の双体仏がある。古戸
 47×25

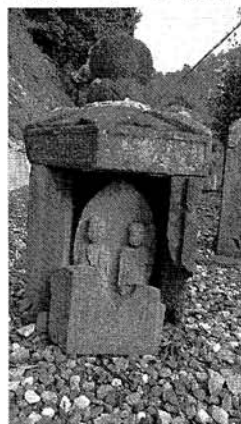
石の仏に見る隠された顔

ている石像はある。だが普光寺のように子供を抱いている石像は見当たらない。そのなかで、古戸川合の石像は興味深い。二体とも女性のように彫られて道祖神に分類されている。双方とも髪は長い。構図として見ても、道祖神には見えない。

普光寺脇の双体仏のように家型墓室に入られていたと見ることも出来ない。普光寺の双体仏のように仏教的な視点から何であるかを想定できない。ただ、キリシタンの見るのが許される



図一⑪ 古戸の双体仏。右のものが、子供を抱いているように見える



図一⑩ 壊れかけの家型墓室 古戸



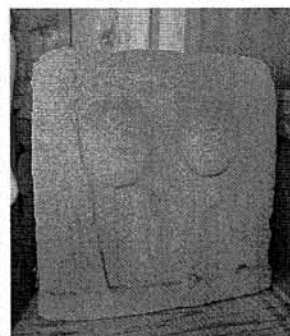
図一⑫ 古戸川合『東栄の石仏』42頁82図 46×26

普光寺には石室の中に墓誌らしきものが入っているものもあった。また、外に出ている墓誌状のものもあった。しかし、表面が摩耗していて読み取れない。

ところで、双体仏は古戸に固有の石仏ではなく、その種



図一⑬ 駒ヶ根 善福寺



図一⑭ 新城市・満光寺 30×30



図一⑮ 新城市・満光寺 26×26

の石像は各地にあったと考えている。ただ、石室内にあったかどうかは判断できない。壊れかけた家型墓石の中に同様の石像は見る事が出来る。東栄町本郷の共同墓地でも家型石室の中に双体仏があることを確認している。そのような事例を踏まえ、双体仏の中には石室を失ったものもありうると見ている。だが、古戸川合の道祖神に分類されている石像は石室の中にはなかったと考えている。この種の双体仏は石仏は、古戸以外では長野県駒ヶ根市神寶山善福寺、愛知県新城市青龍山満光寺の稲荷堂、名古屋市内でも中区と昭和区の二カ所で確認している。新城市の満光寺では稲荷堂の中に二体確認しているが、共に一体彫りであり、地蔵の形式である。住職から詳しい話を伺っていないが、どういう経緯でこれらの石仏が稲荷堂に納められたのかは興味深い。問題なのは、双体仏が形式的に道祖神、あるいは道祖神として分類されていることであり、双体仏が彫られたことの意味が判らなくなっている。古戸のように、石造の墓室から出てきたものでありながら、道祖神に分類されてしまうと本来の意味が消えてってしまう。安曇野の道祖神は男女であり、杯ごとなどをし、二人の睦ましい姿を現していることが多い。だ

が、古戸川合のものには、そのような雰囲気はない。しかも彫られているものが男女ではなく、女性二人だと考えられ、道祖神とは見せない。これまでの石仏探訪の中から多くの石仏を見てきたが、同性（？）のような道祖神の存在は不可解となる。

地勢的に考えてみると、古戸川合は、津具から古戸、本郷に抜けるほぼ中間にあたる。この石像はそういう地点にある。この道は津具から普光寺に繋がり、別所街道に接して本郷に向かう、つまり津具から別所街道への脇道と言うことができる。そこに子供を抱いた双体仏がある。非仏教的な趣を有する古戸川合と普光寺の石仏を道で結ぶと、その先は現在の津具、寺屋敷の観音堂につながるが、そこには天衣を翻したかのような観音像がある。残念ながらこの石像は顔が少し傷つけられているが、腹部には×印、つまり十字架を見ることが出来る。

また古戸の周辺では月、本郷にも道祖神のなものが存在するが、普光寺のように、子供を抱いているようなものはない。普光寺の双体仏の右の一体は男性であり、合掌している。菩薩形ではない。このように合掌している双体仏は東栄町では他に上粟代（『東栄の石仏』4頁5図）にもあるが、それは双体の馬頭観音である。年代は安政五（1860）年で、比較的に新しい。だが、古戸には普光寺の墓域の中に三體仏がある。三體仏と表示しているのは「三尊仏」と区別したいからである。『東栄の石仏』（前掲書1頁図①）では、本郷の岡本にある馬頭観音の三體仏を掲載しているが、制作年代は未詳である。筆者はこの三體仏の存在にも興味を持つてゐる。それは古戸の普光寺の墓域にも三體仏があると言うからだけではなく、「三三」という数字の持つ象徴性からである。三體仏は古



図-16 津具・寺屋敷

46×23
三體仏の存在にも興味を持つてゐる。それは古戸の普光寺の墓域にも三體仏があると言うからだけではなく、「三三」という数字の持つ象徴性からである。三體仏は古

石の仏に見る隠された顔



図-18 古戸・普光寺墓域の中の三體仏 42×33
右の石仏の顔に十字架が見られる

いくつかの非仏教的な石像が集中的にあることを考慮すると、この道筋が隠れキリシタン達の巡拝、巡礼の道ではなかったかと考えてみたい。子安観音、子抱き地蔵を聖母マリア、シメオンと見立て、この三體仏をイエスの誕生を祝福しに來た東方の三賢人に見立てての巡礼路とする仮説である。そのように考えるのは、かつてキリシタンがいたとされる長野県茅野などの地域的背景を考慮すれば三體仏も三尊仏も無理なく受容されることになる。

ところで東栄町の双体の馬頭観音に

戸以外にも在り、長野県茅野市の総持寺と福寿院で確認できる。仏教的な視点に立てば、三體仏は西方極樂浄土の三尊であり、主尊、阿彌陀仏と脇侍、觀世音菩薩、勢至菩薩のことである。觀世音、勢至の両菩薩は、菩薩と称されるにもかかわらず阿彌陀仏の化身である事から仏と解釈され、三尊仏と称される場合は、中央に阿彌陀、両脇に月光あるいは日光菩薩という構造になる。構造的に中尊が大きく作られている。それに対して長野、古戸で見えるものは三體とも同じ大きさであり、三尊仏と見るには問題かも知れない。東栄町の馬頭観音の三體仏は別に述べるとしても、馬頭観音の双体仏は津具にもある。しかし、三尊仏としても北設楽には浄土系の寺院は見当たらない。このような地に、



図-17 『東栄の石仏』より馬頭の三體仏 本郷岡本 46×27

石の仏に見る隠された顔

戻る。基本的に馬頭観音像は単体で作られている。つまり通常は単体のものが意図的に双体化されているとすれば、その背景に特別な意味、意図の存在があったと考えたい。馬小屋で生まれたイエスとの関わりを考えると、双体化することは、ルカの福音書に見るように、マリアとヨセフに見立てられる。子連れでないことは、幼子はシメオンの腕の中にいることになる。合掌する二人はシメオンの言葉を聞いている、あるいは神殿にいることを意味しよう。日本のお宮参りのようにイエスを伴って神殿に詣でたと言われる。子抱き地藏が、子授け、子供の健康を祈る形に見立てられているが、ルカの福音書²² 35を考えると、このようになる。長くなるが、子抱き地藏について語るためにも必要と考えるので引用しておきたい。

22さて、モーゼの立法による彼らのきよめの期間が満了されたとき、両親は幼子を主にささげるためにエルサレムへ連れて行った。23―それは主の立法に、「母の胎を開く男子の初子は、すべて、主に聖別された者と、呼ばれなくてはならない」と書いてあるとおりであった。24―また主の立法に「山ばと一つがい、または家ばとのひな二羽」と定められていることに従って犠牲をささげるためでもあった。25そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。その人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。精霊が彼の上にとどまっておられた。26また、主のキリストを見るまでは、決して死なないと、聖霊のお告げを受けていた。27彼が御霊を感じて宮に入ると、幼子イエスを連れた両親が、その子のために律法の慣習を守るために入ってきた。28すると、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。29「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。30私の目があなたの御救いを見たからです。31御救いはあなたが万民の前に備えられたも

ので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です。」33父と母は、幼子についていろいろ語られることに驚いた。34また、シメオンは両親を祝福し、マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また立ち上がるために定められています。35剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の想いが表れるためです。」

引用した理由は、子抱き地藏、子安観音を考える上でいろいろな示唆を与えてくれるからである。一つは産の清めの期間と言う問題。つまり日本的な嬰兒のお宮参りに相当する記述である。子供を連れ、詣でるマリアとヨセフであり、二人に祝福を与えるシメオン。かなり強引ではあるが、古戸の双体仏にこの情景を重ねることが可能だと考えている。これは古戸に限るものではない。石室に入った、袈裟（頭陀袋）を着用している双体仏もあるので夫婦像と見るべきかも知れない。純粹に巡礼者だとする見立ても可能である。仏教的形式を取りながらも、周辺の他の石仏との関係から内面的にはキリストを待ち受ける夫婦像として作られているように見受けられる。だが、古戸地区では子抱き地藏、もしくは子安観音が見当らない。東栄町の古戸地区には何故か存在していない。しかし、地域全体を俯瞰するならばそのことに拘る必要はない。だがしかし古戸には、興味深い石像があった（図19）、それは「東栄の石仏」には載っていない。不思議なのは胸元に大きなハートの形が隠されていることである。石質は砂岩だが、この辺りのもの

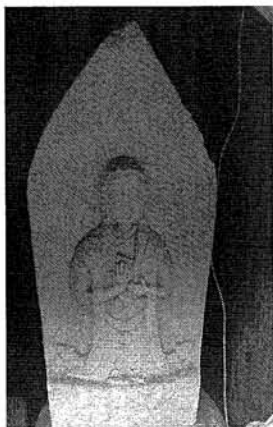


図-19 古戸・胸元にハートが見える石造 18×45
この石造は『東栄の石仏』にない

ではない。年代は不詳で、石像は、民家の入り口付近の祠に有る。元々何処にあったのかは不明である。子抱き地藏、あるいは子安観音は東三河あるいは奥三河各地に点在する観音霊場と地域全体で考えて行くべきだと考える。霊場巡りは同時に子安観音巡りでもあり、子供の成長を願いながら巡ることになる。これは、三十三観音に含まれない仏を拝むことでもある。観音霊場は東栄町近辺では、設楽町平山、田峰などにある。もちろん廃れかけられている処もある。そのような場所

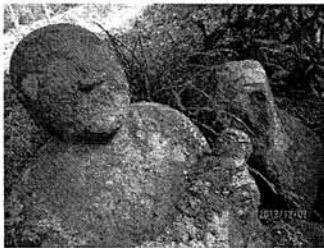


海老地区・子抱

でも子安観音は祀られ、霊場から霊場を結ぶ道筋には子抱き地藏が目印のようにあったと考えられる。そして、田峰から豊川方面への道筋にある海老地区の子抱き地藏は寺の外にあり、寺の敷地とは関係の無い形になっている。海老地区では、子安観音もそこからやや離れたところにある。興味深いことは、海老地区の子抱き地藏の子供は、ただ静かに抱かれているのではなく膝の上に立つ元気な姿で彫られているのである。他の地藏のように赤子を抱くのではなく結跏趺坐した地藏の足の上に立つかのように彫られている。これら子安観音、あるいは子抱き地藏が隠れキリシタンの問題にどのように関わるのかは更なる研究が必要である。しかし、観音霊場の脇、寺社の外に置かれていることに特別な意図を考えた。

双体の馬頭観音、三体仏の存在。そして天神と彫られた布川の屋敷地区の陽石^{（年忌）}。それらについて説明しようとする「珍しい」としか言えない。また、石仏などは仏教的に儀軌に則っていない理由を地方の石工達の仕事だからと説明されるかも知れない。だが、奥三河地方は熊野修験などの影響を受けてきていたことは花祭などで既に指摘され

石の仏に見る隠された顔



月、引田の子抱き地藏

ている。さらに、信濃・高遠の石工達の存在もはっきりしている。このような文化的基盤で、宗教的造営物に何らかの意図的な加工が行われたとすれば、それを指示、あるいは依頼する社会的背景を考えなくてはならなくなる。また民俗的にも、仏教的にも受け入れられるような工夫が其処にあれば庶民は、それを受容したであろう。筆者は仏教にも見え、弾圧されているキリスト教徒達との信仰の妥協点を探りながらの石仏の誕生が其処にあったと考えたい。そうすることによってキリストの誕生を寿ぐかのような子抱き地藏（シメオン）、子安観音像（マリア）が北設楽各地に見ることが出来るからである。少なくとも東栄町あるいは北設楽の各所に観音霊場としてキリストにまつわる石像を分散させれば目立つことはなく、お詣りすることができるとになる。事実、古戸の東南約四キロほどにある布川の天王八王神社の川向かいには、屋敷と呼ばれる地区である。そこの家墓の中に「天神」の字が彫られた陽石が祠にあるのを確認している^{（年忌）}。この陽石と祠を一般的に「天神」（菅原道真）と同一すべきという見方もあるかも知れないが、長野麻績地区にある「天神」の多くがかつては屋敷神^{（年忌）}という事を考え合わせと無理なものとなる。また、子抱き地藏をシメオンに見立てることができるのであれば、ルカの福音書に忠実な事も覗える。よく眼にする子抱き地藏は、若い地藏の姿をしているが古戸の南にある月地区、引田の阿弥陀堂脇の子抱き地藏は年老いた存在として作られている。双体仏はほとんど子供を抱いていない。そして、三体仏の存在は稀である。三尊仏ではないとしたらこれら三体仏はどう解釈すべきだろうか。三体仏の存在はキリスト教の教義の受容に応じていたからではなかったか。つまり、東方の賢人訪問であり、誕生の言祝ぎである。また、四体仏については長崎

瑞和尚とその父の伝承を考えれば可能であろう。さらに興味深いことは父親をキリシタンとして処刑された幼少期の丹瑞は、藏澤寺乾安音貞和尚の指示のもと三州金龍寺で寛文十二(1672)年に得度したと言われる。この金龍寺は愛知県北設楽津具の寺であるとされている。つまり、愛知県北設楽郡は津具(現在)の金龍寺は駒ヶ根とは縁が深かったことは、慶長四年(1599)愛知県北設楽郡津具村金竜寺の五世来円宗擦大和尚が、寺門を復興し澤蔵寺の中興開山となっている。

(註18) 片岡弥吉 『浦上四番崩れ 明治政府のキリシタン弾圧』筑摩書房グリーンベルトシリーズ24 昭和38年 45頁

(註19) 曾根原駿吉郎「木喰僧と石仏」日本石仏協会編『日本の石仏』13号1980年4月

西海賢二『念仏行者と地域社会—民衆のなかの徳本上人—』大河書房 2008年14頁

「当時の庶民の暮らしは幕藩体制に縛られて決して余裕のあるものではなかった。食料がなくてもみたしてくるでもなし、病人があっても医者に診てもらえるものでもなかった。文字どうり苦難と欠乏の生活が強いられていたといえる。したがって信仰のためとはいえ、石仏造立は重荷であったに違いないとしている。ではそれにも関わらず、おびただしい数の石仏が造立されたのはなぜだろうか。」

そして

「江戸時代の仏教は武士や富裕階級の人々に奉仕し、大衆から遊離していた。民衆の中に飛び込んでいった僧侶はごくまれであり、農山村の民衆にとっては時々訪れる名もなき聖や行者などが信仰の先達者として畏敬されていた。彼らの来訪を待って、滞っていた先祖の霊を供養してもらったり、病苦や災難よけに祈禱してもらったりしている。

一般の庶民にとっては、大寺院の僧侶よりも身近にいて自分たちのために奉仕してくれる聖の方が実質的によほど有難かったのである。し

石の仏に見る隠された顔

かも、民衆は現世利益を求めるばかりでなく、来世に望みを託すると言う信仰も併せて持つことが出来た。彼らは無学であっても強く生き抜く哲学を身につけていたわけで、そのことが石仏造立にも大きな影響を与えたことは言うまでもないとしている。

(註10) 林 宏『さばの話 大衆魚「鯖」の、知られざる輝かしい経歴』株式会社クイックス 2011

(註11) レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』岩波書店(岩波文庫下巻) 1933 201頁

(註12) 藏澤寺境内の墓地に高さ50・0cmの無縫塔がある。これが切支丹の罪で処刑された直指人丹瑞(じきしたんずい)和尚の墓である。これを建てたのは、藏澤寺18世祖禪和尚で昭和4年(1929)のことである。塔の裏の銘には「延宝二年十二月入院住職八年当寺三世たるべき人 当寺より伊那常円寺へ他山 出生当村西大津渡」とある。当寺の3世と常円寺の11世を継ぐべき丹瑞が、何故に処刑されたうえ、2箇寺とも住職世代から抹消されなければならなかったのか。そのいきさつを残された資料から紹介する。

丹瑞の父永野四郎左衛門は武門の出身(前身は保科を名のる)であったが、寛永の初め頃、浪人となり小間物商などしながら中沢中曾倉の地に流れて来た。この頃彼は切支丹信者となっていたらしいが、この地に於て村の某女と親しくなり一子丹瑞を出生した。ところが彼が切支丹である事を告訴する者があり、寛永20年(1643)彼は極刑に処せられた。幼少にして父を失った丹瑞は藏澤寺乾安音貞和尚との間に仏門に入る事を約束し、寛文12年(1672)に三州金竜寺にて得度した。(墓碑では延宝2年(1674)となっている。)藏澤寺入山、その後常円寺に転住した。ところが、父の事件があった50年後、元禄10年(1697)既に60歳になっていた丹瑞は、突如女犯の罪で処刑されて命を絶った。世が切支丹迫害の時期であった為、類族として丹瑞もまた処罰されたというのが地方史家の推測である。

石の仏に見る隠された顔

『改訂駒ヶ根市の文化財』平成24年 駒ヶ根市文化財編集委員会「切支丹の墓」 157頁。

(註13) 『新約聖書詩編付』新改訳 財団法人日本国際ギデオ協会2014(4)

(註14) 拙論。石の仏に見る隠された顔―石仏のイコロジー(3)―
―本学

(註15) 『麻績村石造文化財―その姿と伝承―』麻績村誌編纂会
昭和六三年

ここでは、麻績地区の例のみを取り上げて置く。そこでは石祠の多くが山の神であったり、荒神と分類されているが石祠149、150、151(麻績地区中町天神山)、133、131、130(中町町中)などには天神宮、あるいは屋敷神が屋敷外に出されていることを見る。これは屋敷内で祀ることを不安に思ったからではなかったかと考えた。なお、この麻績地区の資料を精査中である。

(註16) 『第5回全国かくれ切支丹研究大会記念誌―史跡と文化遺産に富む島 沓岐』

沓岐島遺跡保存研究会平成4年(平成5年改) 51頁 芦辺町箱崎江角触 荒神大明神

荒神大明神(高がみ様、荒神様)の木造祠の床下より発見された石像。(1974・11・25)松田重雄氏によれば4人石像は宣教師のガウン姿・按手型・向かって右からヨブ、エリバズ、ビルダデ、ゾパル。素人造りだが旧約に深い理解を持った信者の発想と記している。

(註17) 『北斎の隠し絵』荒井努 183頁 AA出版1989
で「小布施郷土史会」の『語り継ぐ小布施』を引用し、福島正則が小布施で岩盤を彫って元和年間に観世音菩薩を安置し、穴観音と称していたことを記している。この観世音菩薩がマリア観音だと言われ須坂の寿泉院にあるという。